

対人認知様式の個人差に関する研究 (I)*

— 仮定された類似性と類似-魅力説 —

林 文 俊¹⁾

I 問 題

周知のように、Fiedler, Warrington, & Blaisdell (1952) は、人は自分が好意をいづく他者のパーソナリティを自己に類似させて認知する傾向 (assumed similarity, 以下 As と略す) があることを見だし、対人場面で作用する As 傾向の重要性を強調している。その後、Lundy, Katkovsky, Cromwell, & Shoemaker (1955) は、現実自己の概念と理想自己の概念との差違 (自己受容性) に着目した検討を行ない、As 傾向は、自己の受容するパーソナリティ特性において顕著であり、また各被験者の As 傾向の強さと自己受容性の程度との間には有意な正の相関があることが明らかにされた。

我国でも As 傾向に関する研究は、これまでに多数なされている。例えば、吉田 (1957) は被験者の向性次元を、藤野 (1961) は Murray, H. A. の Personality description リスト中の 30 項目を取り上げて、Lundy et al. (1955) と同様の知見を得ている。また田中 (1967) および浜名 (1974) は、Self-Differential Scale を用いて、同じく As 傾向の存在を確認している。

これに対して、梶田 (1967, 1968) は、As 傾向なるものは、実は理想化傾向 (好意をいづく他者を理想自己に類似させて認知する傾向) によってもたらされた 2 次的な見せかけ上の傾向にすぎない、という注目すべき主張をしている。彼によれば、多くの人は自分自身および好意をいづく他者を理想自己に近づけて認知する傾向を持つために、結果的に好意をいづく他者の概念と現実自己の概念との間に見せかけの相関が生ずると言うので

ある。梶田 (1968) は、この主張を裏づける結果の 1 つとして、自己評価水準²⁾の低い人の場合には As 傾向が認められないことを指摘している。

他方、Byrne (1961a, 1971 など) とその共同研究者たちは、類似性を独立変数として操作し、従属変数としての対人魅力に及ぼす影響を吟味する実験的方法を樹立した。類似性が対人魅力の決定因であるとする彼らの類似-魅力説 (similarity-attraction theory) によれば、態度ないしは他の諸属性 (パーソナリティ、能力、経済状態など) における他者との類似は、それが何らかの意味で自己に報酬的である限り、当該他者に対する魅力の増加をもたらすとされる。

この類似-魅力説に関しても、これまで膨大な量の研究がなされ、態度の類似性と魅力との関係については、両者の間に正の直線的関係が存在することが実証されている。しかし、パーソナリティや欲求の次元を問題とした研究では、Winch (1955) の相補説との対立もあり、従来必ずしも一貫した結果が得られていない。例えば、Hendrick & Brown (1971) は、向性次元における類似性と魅力との関連を検討したところ、6 種の魅力測度のうちの 4 つ (相手への好意度、パーティでの面白さ、理想的人格、リーダーとしての好ましさ) においては、外向型の者も内向型の者も外向的な刺激人物 (以下、SP と略す) の方を高く評価し、残りの 2 測度 (友人としての信頼性、正直さと倫理性) では、両群ともそれぞれ自己と類似した SP の方を高く評価する、といった結果を得ている。我国においても、吉田 (1974) および中里・井上・田中 (1975) が、これと同様の結果を報告している。

* 本研究を進めるにあたり御指導いただきました名古屋大学教育学部の大橋正夫教授に深く感謝致します。なお、本研究の資料分析のための計算は、名古屋大学大型計算機センターの FACOM M-200 によった。

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士後期課程 教育心理学専攻 (現在、研究生)

2) ここでいう自己評価水準とは、現実自己の概念と理想自己の概念との相関係数を測度としたものであり、その意味内容は Lundy et al. (1955) のいう自己受容性と共通している。

類似-魅力関係に影響を及ぼす個人差要因についても、これまで被験者の権威主義傾向 (Byrne, 1965), 認知的複雑性 (Baskett, 1968), self-esteem (Hendrick & Page, 1970) などが検討されているが、いずれも明確な実験結果は得られていない。ただ例外的に、親和欲求を扱ったByrne (1961b, 1962)の研究では有意な効果が見いだされており、Byrne (1971)は、類似-魅力関係における個人差をレビューした中で、この要因を有望視している。また、Byrne & Clore (1967)を始め幾つかの研究では、類似-魅力関係の基底を成す媒介変数として、White (1959)のいう effectance motive の概念が用いられており、このような観点からしても、類似-魅力関係における個人差要因の及ぼす影響は、今後さらに検討すべき重要な課題であると思われる。

さて、前述したAs傾向についても、Fiedler (1954)の提唱したASo測度に代表されるように、本来その個人差が問題とされるべき性質のものであろう。この点に関連して田中 (1967)は、現実自己の概念と好意をいさぐ他者に対する概念との相関 (As傾向を表わす)を被験者毎に求めた場合の分散がかなり大きいことに着目している。さらに梶田 (1968)の研究も、As傾向における個人差を強調するものとして捉えることもできよう。

このように考えてくると、類似と魅力 (好意) の間の因果関係の問題はさておき、As傾向の強弱における個人差と類似-魅力説の枠組で生ずる個人差の間には、一貫した関連があることが予想される。

本研究では、このような問題意識に立脚し、As傾向の強弱の個人差との関連からパーソナリティ次元における類似-魅力説を考察することを主目的として、以下に述べる2つの検討を行なった。

II 検討 A

1. 目的

ここでは、梶田 (1967, 1968)の所説を考察の中心に据え、As傾向が大部分の認知者に共通して認められる一般的現象であるか否かの問題を検討する。また、As傾向と個々人の自己受容性などとの関連についても、追加的な検討を加える。

2. 方法

1) 調査の実施

被験者は中学2年生2クラス計72名 (男子38名, 女子34名)で、調査の実施手続きは次のとおり。

SPの選択: はじめに、「このクラスの人たちの中で、あなたが好きな人 (日頃、仲良くつき合っている人) と嫌いな人 (日頃、あまり仲の良くない人) を2人ずつ思

い浮べて下さい」と教示し、これら4人の氏名を調査票の所定欄に記入させた。

活動性尺度上での評定: 4人のSPならびに自分自身の性格的特徴を、表1に示した10対の特性尺度上で評定させた。評定に際しては、「ある人物の性格的特徴として、

表1. 活動性尺度上での評定例

(この例は、すべての尺度で活動性の高い方向に評定したケースを示している)

1	〔冷静な つめたい〕	←→	〔情熱的な うかれた〕
2	〔勇敢 (ゆうかん) な むこうみずな〕	←→	〔注意深い おく病な〕
3	〔活発な がさがさした〕	←→	〔落ちついた ぐずぐずした〕
4	〔静かな むっつりした〕	←→	〔明るい うるさい〕
5	〔すばやい そそっかしい〕	←→	〔ゆったりした のろまな〕
6	〔ひかえめな 消極的な〕	←→	〔積極的な でしゃばりな〕
7	〔きびきびした 短気な〕	←→	〔のんびりした 気の長い〕
8	〔きちょうめんな くそまじめな〕	←→	〔ざっくばらんな いいかげんな〕
9	〔おもしろい 調子 (ちょうし) がいい〕	←→	〔まじめな ユーモアのない〕
10	〔用心深い 疑い深い〕	←→	〔気楽な 不注意な〕

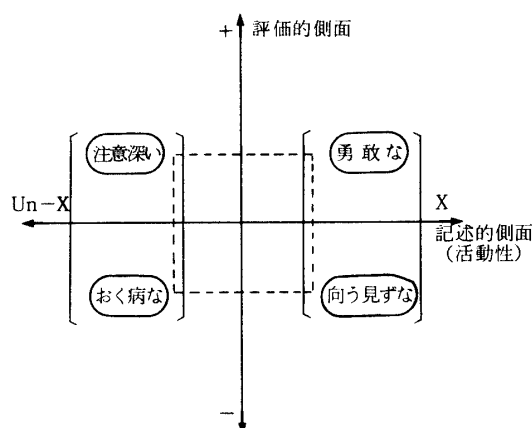


図1. 活動性尺度の構成例 (尺度No. 2)

左側の2つの特性を合わせたものと右側の2つを合わせたもののうち、どちらがよりぴったり当てはまると思うか」を判断し、いずれかの極に○印をつけるよう教示した。また、どうしても決めかねる場合には、中間の線分上に○印をつけることを許した。これら10尺度は、Peabody (1967) のいう認知の記述的側面をとらえることを企図して、彼の研究を参考に構成したものである(図1参照)。取り上げた尺度内容は、全体として活動性次元を中心としたパーソナリティ認知を表わすものとなっているので、便宜的に活動性尺度と呼ぶ。なお、活動性の次元は、パーソナリティ認知構造の諸次元の抽出を試みた従来の研究において、いわゆる評価的次元とは独立した主要次元の1つであることが知られている(Rosenberg & Sedlak, 1972; 林, 1978; など)。

Self-Differential 尺度上での評定: 先に挙げた4人のSPのうち、特に好きな人、嫌いな人を1名ずつ選ばせ、その氏名を所定欄に記入させた。そして、これら2人の人物に自分自身および理想自己を加えた合計4つの概念の性格的特徴を、長島ら(1966)の作成したSelf-Differential 尺度(中学生版)上で評定させた。

2) 分析の方法

収集した資料は、次の手順に従って分析された。以下では、現実自己の概念、理想自己の概念、好きな他者の概念、嫌いな他者の概念、好きな他者自身の自己概念、嫌いな他者自身の自己概念についての評定資料を、それぞれ、S, I, OI, Od, S'1, S'd と表記する。

ステップ1: 最初に、活動性尺度上での評定資料から、各資料毎の活動性得点を求める。得点化に際しては、各尺度毎に表1に例示された方向での評定に1点、反対の極での評定に0点、中間評定に0.5点を与える。したがって、各資料毎の活動性得点は0~10点の範囲に分布する。As 傾向の分析にあたっては、次の3種の指標を、活動性得点間の積率相関係数により算出した。

- ① real similarity. S と S'1 (ならびに S'd) の相関。
- ② assumed similarity. S と OI (ならびに Od) の相関。
- ③ accuracy. OI と S'1 の相関および Od と S'd の相関。

ステップ2: Self-Differential 尺度上での評定資料を、梶田(1967)と同様な方法により分析する。すなわち、まず各被験者毎に4つの概念に対する評定相互間の積率相関係数を求め、これをZ変換した後、概念の組合せ条件毎に全被験者の平均値と標準偏差を算出する。なお、各々の概念に対する評定資料間の相関を求める場合には、尺度の方向の変化に応じて、得られる相関係数が異なってくるといった問題がある。そこで本研究では、仮に全

ての尺度を価値的方向で統制した場合³⁾の結果についても検討を加えた。

ステップ3: 35組の形容詞対から成る Self-Differential 尺度上での評定資料に基づいて、35次元ユークリッド空間における各概念間の距離を考え、そこから As 傾向に関連した次の3測度を被験者毎に算出する。

- ① AS 得点。S と OI との距離を $Dis(S, OI)$, S と S'1 との距離を $Dis(S, S'1)$ と表わし、

$$AS = Dis(S, S'1) - Dis(S, OI) \dots\dots (1)$$

と定義する。この測度は、好きな他者と自己の間の認知された距離が実際の距離よりも小さいほど得点が大となるので、Fiedler (1951) のいう「不当に仮定された類似性 (unwarranted assumed similarity)」の測度としての UASp に対応する。

- ② ADS 得点。嫌いな他者を実際以上に自己と非類似であると認知する傾向を表わすもので、

$$ADS = Dis(S, Od) - Dis(S, S'd) \dots\dots (2)$$

と定義する。

- ③ IDL 得点。好きな他者を実際以上に理想自己に近づけて認知する傾向を表わすもので、

$$IDL = Dis(S'1, I) - Dis(OI, I) \dots\dots (3)$$

と定義する。

ステップ4: 以上の他に、次の3種の測度を各被験者毎に求めた。

- ① MPP および \overline{LPP} . MPP は好きな他者、LPP は嫌いな他者に対する評価の高さを表わし、ステップ2において尺度の価値的方向を統制した場合の尺度得点の総和。なお、 $\overline{LPP} = -LPP$ とした。

- ② ASo. Self-Differential 尺度上での OI と Od に対する評定のズレを表わし、 $ASo = Dis(OI, Od)$ 。

- ③ 自己受容性。Dis(S, I) で与えられ、この値が小さいほど自己受容性が高い。

3. 結果

1) 活動性得点から見た As 傾向

表2は、各概念に対する活動性得点間の積率相関係数を示したものである。S・S'1 および S・S'd での相関はいずれも0に近く、好きな他者(あるいは嫌いな他者)と自己との間の現実の活動性水準の類似性は存在しないに等しい。また、OI・S'1 および Od・S'd では、い

3) この場合には、7点尺度の両極のうち、価値的に低い極から高い極への方向に1点~7点と得点化する。

対人認知様式の個人差に関する研究 (I)

れも有意な正の相関が認められ、各被験者は他者の活動性水準をある程度正確に認知していることが解る。問題の As 傾向については、S・O1 が有意な正の、S・Od が有意な負の相関を持つことから、一応 As 傾向の存在が窺われる。しかし、これらの相関は有意とは言え、 $|r| = .20$ 前後の低いものであり、榊原甲式向性検査を用いた吉田 (1957) の研究でも、これ以上の相関は得られていない。

表 2. 活動性得点に基づく概念間の積率相関係数 (N = 144)

Real similarity		Assumed similarity		Accuracy	
S・S1	S・Sd	S・O1	S・Od	O1・S1	Od・Sd
.05	-.16	.21*	-.18*	.35**	.55**

注) **は $P < .01$, *は $P < .05$ で有意な相関を示す。

2) 被験者毎に見た概念間の相関・偏相関による分析

表 3 は、梶田 (1967) の方法に準じて各被験者毎に求めた概念間の相関、偏相関 (いずれも Z 値) の平均および標準偏差である。参考のため、梶田 (1967) の結果ならびに尺度の方向変換を施した場合の結果も示した。表 3 の下 2 行が偏相関による検討結果であり、 $\langle S \cdot O1 \rangle$ は、I と S1 の影響を恒常にした時の S と O1 との偏相関係数を被験者毎に求めて Z 変換した値を表わす。

総じて本研究の結果は、梶田 (1967) にほぼ対応して

表 3. 各概念間の積率相関係数 (Z 変換値) の平均および標準偏差 (N = 72)

	梶田 (1967) の結果 Mean (SD)	本研究の結果 尺度の方向変換	
		無	有
		Mean (SD)	Mean (SD)
S・I	.39 (.46)	.61 (.42)	.49 (.34)
S・S1	.31 (.28)	.39 (.33)	.34 (.30)
S・Sd	.22 (.26)	.22 (.24)	.20 (.24)
I・S1	.56 (.27)	.45 (.39)	.30 (.26)
I・Sd	.44 (.27)	.36 (.34)	.31 (.23)
S・O1	.38 (.46)	.44 (.37)	.34 (.32)
S・Od	-.13 (.24)	-.14 (.39)	-.05 (.35)
I・O1	.89 (.34)	.78 (.45)	.44 (.33)
I・Od	-.32 (.45)	-.30 (.42)	-.10 (.34)
O1・S1	.52 (.28)	.45 (.37)	.36 (.30)
Od・Sd	-.04 (.26)	.07 (.33)	.14 (.30)
$\langle S \cdot O1 \rangle$.05 (.27)	.12 (.23)	.14 (.23)
$\langle S \cdot Od \rangle$	-.10 (.20)	.01 (.30)	.00 (.28)

注) $r = .40$ に対応する Z 値 = 0.43

おり、S・I、S・O1、I・O1 については、いずれも高い正の相関が得られている。特に、I・O1 で最大の相関が認められることは両研究とも共通しているが、本研究における S・I の相関は梶田のそれよりもやや高くなっている。また、尺度の価値的方向を統制した場合は、全般に相関値が低下するが、それでもなお S・I および I・O1 には高い正の相関が認められる。さらに、偏相関による検討では、 $\langle S \cdot O1 \rangle$ の平均値はほぼ 0 となっている。

3) 概念間の距離測度による分析

表 4 は、AS 得点、ADS 得点、および IDL 得点の被験者全体の平均と標準偏差を示している。AS 得点の平均はほぼ 0 に等しく、As 傾向は認知者の大部分に共通した一般的現象であると言い難い。しかし、AS 得点の大きさには被験者間でかなりのバラツキがあり、この得点の高低が対人認知様式における個人差の指標として意味を持つものであるか否かについては、さらに分析を加える必要がある。なお、前項で算出した $\langle S \cdot O1 \rangle$ の大きさと AS 得点との間には $r = .36$ なる有意な正の相関が認められた。

他方、ADS 得点および IDL 得点の平均は、いずれも 0 より有意に大となっている。このことより、嫌いな他者を実際以上に自己と非類似であると認知する傾向および好きな他者を実際以上に理想自己の概念に近づけて認知する傾向は、多くの個人に共通して認められる現象であると言える。

表 4. 概念間の距離測度による分析

	Mean	(SD)	0からのズレ
A S	0.42	(3.22)	$t = 1.10$ n.s.
A D S	4.04	(4.85)	$t = 7.02$ **
I D L	2.53	(3.78)	$t = 5.64$ **

注) **は $P < .01$ で有意

4) As 傾向と他の指標との関連

まず前項で算出した 3 種の得点相互間の関連を調べたところ、AS 得点と IDL 得点との間には $r = .50$ なる高い正の相関が認められたが、この他の相関はいずれも有意でなかった。ここで、AS 得点と ADS 得点との相関が小さい ($r = -.19$) ことは、両者が対人認知様式における相互に独立した側面を測定していることを示唆していて興味深い。

次に、これら 3 得点と他の指標との相関を見ると (表

5.), AS得点は自己受容性の高い者ほど大となっている。また, ADS得点はLPPと $r = .75$ なる高い正の相関を持つ。これより, 嫌いな他者を実際以上に自己と非類似であると認知する傾向は, 嫌いな他者を評価的に低く見る傾向と密接な関連を持つことが解る。IDL得点はMPPと有意な正の相関を示しているが, このような結果も両測度の意味内容からして首肯できる。

表 5. 距離測度と他の指標との関連
(積率相関係数)

	MPP	LPP	ASo	自己受容性
A S	-.05	-.04	-.13	-.28*
A D S	.22	.75**	.75**	-.16
I D L	.57**	-.01	.20	.07

注) 自己受容性の測度は, 得点が小さいほど受容性が高い。

** は $P < .01$, * は $P < .05$ で有意

以上, 要約するに, 検討Aで得られた主要な結果は, いずれも梶田(1967)の主張を支持する方向にある。すなわち, (1) As傾向は大部分の個人に共通して認められる一般的現象とは言えず, (2) この傾向の強さは理想化傾向と密接な関連を持つ, と結論づけできる。

III 検討 B

1. 目的

各個人のAs傾向の強さが, 対人認知様式の個人差指標として意味を持つものか否かを吟味するために, Byrne一派の主張する類似-魅力説の枠組で以下の仮説を検討する。

仮説: As傾向の強弱における個人差は, 類似-魅力関係に対しても有意な認知様式の差違をもたらし, この傾向の強い認知者は, そうでない者に比べて, 自己に類似した他者により大きな魅力をいだくであろう。

2. 方法

被験者は検討Aと同じ中学2年生2クラス72名を対象とし, 以下の手続きにより実験を行なった。

SPの呈示: Byrne(1971)のいわゆる標準未知者法に準拠した。すなわち, 検討Aにおける活動性尺度上での評定後約2ヶ月の間隔をおいて, 「このクラスの中のある人が前回の調査で回答した例である」との教示のもとで, 一方のクラスには表1.に例示された回答用紙を, 他方のクラスにはこれと全く逆方向での回答用紙を配布した。表1.の回答例は, 活動性の高い方向に評定した例を

示しているので, 以下この例により呈示されたSPを $SP = H$, もう一方の刺激人物を $SP = L$ と表記する。

SPに対する評定: 上記の手続きにより呈示されたSPが「性格的にどのような特徴を持った人であるかを想像して, 以下の質問に答えて下さい」と教示し, 次の3種類の判断尺度上で評定を求めた(いずれも7点尺度)。

① パーソナリティ印象の評定尺度。暗い-明るい, がまん強い-あきっぽい, 自信のない-自信がある, 親しみやすい-親しみにくい, ふまじめな-まじめな, 消極的な-積極的な, 好感がもてる-好感がもてない, 遊び友達として楽しくない-遊び友達として楽しい, 信頼できる-信頼できない, 尊敬できない-尊敬できる, 思いやりのない-思いやりのある, 責任感の強い-無責任な, 協調性のない-協調性のある, の13尺度。

② 魅力度(好ましさ)の評定。表8.の表側の3~8.に示された6項目について, SPがどのくらい好ましい人物であるかを評定させた。

③ 類似度の評定。最後に, SPの性格が自分自身の性格とどのくらい似ていると思うかについて, 7点尺度上で判断を求めた。

3. 結果

1) 実験操作の効果の吟味

まず, 検討Aの分析方法のステップ1で算出された活動性得点の中位数に基づいて, 各クラス毎の被験者を, 活動性水準で高一低2群に分割した。そして, 本検討の類似度評定資料を, 「非常によく似ている」~「全く正反対である」の反応まで7点~1点と得点化し, この平均と標準偏差を各群別に示したのが, 表6.-1.および表6.-2.である。

表6.-1.によれば, $SP = L$ との認知された類似度は,

表 6.-1 SP=Lとの認知された類似度
(被験者群別)

Vpの活動性	低群	高群	平均値の 差の有意性
N	18	18	
Mean	2.8	1.6	P<.01 t = 4.48
(SD)	(1.0)	(0.5)	

表 6.-2 SP=Hとの認知された類似度
(被験者群別)

Vpの活動性	低群	高群	平均値の 差の有意性
N	18	18	
Mean	3.6	5.4	P<.01 t = 4.42
(SD)	(1.5)	(1.0)	

対人認知様式の個人差に関する研究 (I)

活動性の高い群よりも低い群の方が有意に大きくなっている。またSP=Hについては(表6-2), 活動性の高い群の方が低い群よりも類似度を大きく認知している。これらの結果より, 本研究で企図した活動性水準におけるSPと自己との類似-非類似の実験操作は, おおむね成功したものと見做すことができる。

2) パーソナリティ印象と魅力度(好ましさ)

各SPに対するパーソナリティ印象評定資料全体を因子分析(主因子法, バリマックス回転)したところ, 固

有値 ≥ 1.0 の因子が2つ抽出された(表7)。第I因子は, 暗い-明るい(.96), ふまじめな-まじめな(-.93), 遊び友達として楽しくない-遊び友達として楽しい(.87), といった尺度での負荷量が高く, これは林(1978)のいう個人的親しみやすさの因子と活動性とが融合した因子と解釈できる。また第II因子は, 信頼できる-信頼できない(-.74), 責任感の強い-無責任な(-.69), 協調性のない-協調性のある(.67)などの負荷が高いことから, 社会的望ましさの因子と解釈できる。

これら2因子に対する因子得点に基づいて, 各群の被験者が認知したSPの平均的位置を求めた結果が, 表8の上2行(項目1, 項目2)に示されている。これによると, 個人的親しみやすさおよび社会的望ましさの両次元とも, SP=Lは, 活動性の高い群よりも低い群において, よりポジティブに認知されている(すなわち, 類似-魅力関係が妥当する)。

また, 表8の項目3~項目8の結果は, 各SPに対する好ましさの評定資料を「非常に好ましくない」~「非常に好ましい」の反応まで1点~7点と得点化した場合の, 各群別の平均および標準偏差である。SP=Lは, 活動性の低い群において, 「一緒に勉強する仲間」および「長い間つき合う友人」として有意に高く評定されている。また, 項目4, 項目6, 項目7についての結果も, 同じく類似-魅力説を支持する方向にある。他方, SP=Hに対する認知に関しては, 群間でほとんど有意な差がないが, わずかに「長い間つきあう友人として」の1

表7. パーソナリティ印象の因子分析

尺度	因子	I	II
1. 明るい		.96	.08
2. あきっぱい		.67	-.18
3. 自信がある		.57	.34
4. 親しみにくい		-.79	-.17
5. まじめな		-.93	.10
6. 積極的な		.83	.20
7. 好感がもてない		-.74	-.26
8. 遊び友達として楽しい		.87	.12
9. 信頼できない		-.02	-.74
10. 尊敬できる		.04	.63
11. 思いやりのある		.34	.56
12. 無責任な		.13	-.69
13. 協調性のある		.41	.67
$\sum a_i^2 / N \times 100$ (%)		42.2	19.2

表8. 各SPに対する魅力度の比較
(被験者群別)

SPの活動性	低 (SP=L)			高 (SP=H)		
	Vpの活動性	低群	高群	差の有意性	低群	高群
項目	Mean (SD)	Mean (SD)		Mean (SD)	Mean (SD)	
1. 個人的親しみやすさ	-0.83 (0.28)	-1.03 (0.29)	*	0.91 (0.25)	0.96 (0.35)	n.s.
2. 社会的望ましさ	0.24 (0.90)	-0.36 (0.85)	*	-0.06 (1.06)	0.19 (0.78)	n.s.
3. クラスの委員として	2.9 (1.6)	2.2 (1.4)	n.s.	4.9 (1.3)	4.8 (1.2)	n.s.
4. 悩みをうちあける友人として	2.5 (1.2)	1.7 (1.2)	P<.10	3.3 (1.1)	3.9 (1.5)	n.s.
5. 一緒に勉強する仲間として	3.4 (1.7)	2.1 (1.1)	**	4.4 (1.4)	4.1 (1.5)	n.s.
6. グループ活動の仲間として	2.8 (1.4)	2.0 (1.4)	P<.10	5.2 (1.4)	5.4 (1.5)	n.s.
7. 遊び友達として	2.0 (0.8)	1.5 (0.8)	P<.10	5.3 (1.3)	5.7 (1.3)	n.s.
8. 長い間つきあう友人として	2.5 (1.2)	1.4 (0.7)	**	3.6 (1.8)	4.8 (1.5)	*

注) **はP<.01, *はP<.05で有意

項目で、活動性の高い群は、この人物をより高く評定している。

3) As 傾向の個人差と類似-魅力関係

ここでは、本研究の仮説を検証するために、検討Aにおいて得られた各個人毎のAS得点の分布の中位数に基づいて、被験者をAs傾向の強い群と弱い群とに2分し、これと各人の活動性得点の高-低を組合せた合計4群について、各SPに対するパーソナリティ印象および魅力度(好ましき)の評定の群間の差異を分散分析により検

表 9-1 <一緒に勉強する仲間>としての SP=L に対する魅力度

Vpの活動性	低 群		高 群		分散分析の結果
	As 傾向 弱	As 傾向 強	As 傾向 弱	As 傾向 強	
N	8	10	10	8	P<.05 F = 3.99
Mean	2.9	3.8	1.7	2.5	
(SD)	(1.6)	(1.6)	(1.1)	(1.1)	

t = 1.10^{n.s.}

表 9-2 <グループ活動の仲間>としての SP=L に対する魅力度

Vpの活動性	低 群		高 群		分散分析の結果
	As 傾向 弱	As 傾向 強	As 傾向 弱	As 傾向 強	
N	8	10	10	8	P<.10 F = 2.56
Mean	2.1	3.4	1.9	2.1	
(SD)	(1.1)	(1.3)	(1.3)	(1.6)	

t = 2.13, P<.05

表 9-3 <遊び友達>としての SP=L に対する魅力度

Vpの活動性	低 群		高 群		分散分析の結果
	As 傾向 弱	As 傾向 強	As 傾向 弱	As 傾向 強	
N	8	10	10	8	P<.10 F = 2.47
Mean	1.6	2.3	1.5	1.5	
(SD)	(0.5)	(0.8)	(0.8)	(0.8)	

t = 2.03, P<.10

表 9-4 <長い間つき合う友人>としての SP=L に対する魅力度

Vpの活動性	低 群		高 群		分散分析の結果
	As 傾向 弱	As 傾向 強	As 傾向 弱	As 傾向 強	
N	8	10	10	8	P<.01 F = 7.15
Mean	1.7	3.0	1.3	1.5	
(SD)	(0.7)	(1.2)	(0.7)	(0.8)	

t = 2.56, P<.05

討した。

SP=Lに対する評定については、「一緒に勉強する仲間」、「グループ活動の仲間」、「遊び友達」、「長い間つきあう友人」の4項目において、群間にP<.10で有意な差が検出された(表9-1~表9-4)。

さて、本研究の仮説に従えば、SP=Lに対する評定は、(1).活動性の高い群よりも低い群において、かつ、(2).活動性の低い群の中でも、As傾向の弱い者より強い者において、よりポジティブな方向へ偏ることが予想される。このうち(1).に関しては、上記の分散分析で有意差が検出された4項目のいずれにおいても両群間に有意な(P<.10)差が認められたので(表8)、ここでは(2).に関して、活動性が低い群の中でのAs傾向の強弱による平均値の差の有意性を検定した。結果は、表9-1~表9-4の下部に示されており、「グループ活動の仲間」(t = 2.13, P<.05)、「遊び友達」(t = 2.03, P<.10)、「長い間つき合う友人」(t = 2.56, P<.05)の3項目については、As傾向の弱い群よりも強い群の方がSP=Lを有意に高く評定している。特に、これら3項目のいずれをとっても、活動性が低くAs傾向が強い群での評定値が、他の3群よりも顕著に高くなっていることは注目に価する。

他方、SP=Hに対する評定についても同様な検討を行なったが、こちらは、いずれの項目をとっても群間で有意な差は認められなかった。

以上要約するに、検討Bでは、活動性の低いSPについてのみ、Byrneの類似-魅力説ならびに本研究の仮説を支持する結果が得られた。

IV 討 論

本研究は、Fiedler et al. (1952)により提唱された「仮定された類似性」の傾向(As傾向)の強弱が、個々人の対人認知様式の個人差を表わす有効な指標となり得るか否かを吟味する目的でなされた。

検討Aでは、まず梶田(1967)と同様、概念間の相関および偏相関による分析を行なったところ、梶田(1967)とほぼ一致した結果が得られ、As傾向は理想化傾向と密接な関連を持つことが追認された。また、自己受容性の高い人ほどAs傾向が強いという結果も梶田(1968)と符合する。

さらに、Fiedler(1951)のUASpに対応する測度として、(1)式により定義されるAS得点を個人毎に算出し、この得点の被験者全体での平均と標準偏差を求めた。得られた平均値は0より有意に大とは言えず、As傾向は大部分の個人が共通して持つ一般的現象ではないことが、梶田(1967, 1968)と別の方法によっても再確認さ

れた。

Byrne (1961a, 1971 など) の類似-魅力説の枠組に基づく検討 B では、活動性水準の低い S P についてのみ、彼らの主張を支持する結果が得られた。彼らの説を向性次元で扱った吉田 (1974) の研究においては、外向型の S P に対する魅力点は外向群の方が有意に高いが、内向型の S P に対する場合は内向群と外向群との間で一貫した差が認められていない。本研究で取り上げた活動性水準を向性と同列なものと仮定すると、両研究は、有意差が認められた S P に関して互いに逆の結果になっている。両研究には、S P の評定手続きや被験者の年齢等の点で違いがあるが、いずれにせよ、向性 (あるいは活動性) 次元については、類似-魅力説がそのままの形では妥当しないことは確かであろう。

ところで、本研究の中で最も注目すべき結果は、個々人の As 傾向の強弱が、類似-魅力説の枠組に基づく仮想的 S P の認知に際しても有意な差違をもたらした点であろう。すなわち、活動性の低い被験者群の中でも、とりわけ As 傾向の強い個人は、自己と類似した活動性の低い他者に対してより大きな魅力を示した。このような結果は、As 傾向が対人認知様式の個人差を表わす有効な指標となり得ることを物語る。

しかし、As 傾向の強い者の方が自己と類似した他者に対してより大きな魅力を感じるといった結果は、認知者の自己受容性の高低によって説明できるかもしれない。すなわち、検討 A で明らかにされたように、As 傾向は自己受容性の高い者ほど強い傾向がある。したがって、

表 10. S P = L に対する活動性の低い群での魅力度 (自己受容性の高低別)

	自己受容性		差の 有意性
	低 Mean (SD)	高 Mean (SD)	
1. 個人的親しみやすさ	-0.90 (0.34)	-0.77 (0.20)	n. s.
2. 社会的望ましさ	0.48 (1.05)	-0.02 (0.70)	n. s.
3. クラスの委員として	2.7 (1.6)	3.2 (1.7)	n. s.
4. 悩みをうちあける友人として	2.6 (1.3)	2.4 (1.2)	n. s.
5. 一緒に勉強する仲間として	3.2 (1.4)	3.6 (1.9)	n. s.
6. グループ活動の仲間として	2.3 (1.0)	3.3 (1.6)	n. s.
7. 遊び友達として	1.7 (0.7)	2.3 (0.7)	P < .10
8. 長い間つきあう友人として	2.0 (0.7)	2.9 (1.5)	n. s.

活動性が低く As 傾向の強い個人は、自己の活動性の低さを受容している人間と考えられ、このような個人は自己と同じく活動性の低い他者に対しても比較的大きな魅力を感じると解釈できるかもしれない。もし、このような解釈が妥当ならば、わざわざ As 傾向の個人差なる指標をもちだすまでもないであろう。そこで、このような解釈の妥当性を検討するために、活動性の低い被験者群を自己受容性の高-低で 2 分し、活動性の低い S P に対する魅力度の群間の差違を調べてみた (表 10)。

表 10. によれば、両群間で差違のある項目は、「遊び友達」としての好ましさのみであり ($t = 2.00, P < .10$)、自己受容性の高低を媒介とした解釈からは、必ずしも本研究の結果を説明できない。この点からも、As 傾向の強弱といった個人差指標を考えることの有効性が支持されよう。

次に、従来の研究では、他者との類似性の知覚と当該他者に対する魅力 (好意) との因果関係が問題にされてきた。この点に関し、Izard (1961) は、パーソナリティの類似性の方が先行すると主張し、吉田 (1964) もこれと類似した結果を得ている。本研究は両者の因果関係の吟味を目的としたものではないが、As 傾向の強弱の個人差が類似-魅力関係にも有意な差異をもたらすという結果は、両者の間の相互影響性を裏付けている。すなわち、交友関係の形成過程においては、類似性が相手への魅力を生じさせ、次には相手への魅力 (好意) が認知者に実際以上の類似性を仮定させ、……といった「魅力が魅力を生む」過程が想定できる。このような類似→好意の方向の因果関係は、自己概念の類似度を実験的に操作した吉田・中川 (1969) の研究でも示されている。

最後に、本研究の主要な結果を要約すると、次の 3 つにまとめられる。

(1). Fiedler et al. (1952) が主張した As 傾向は、大部分の認知者に共通して見られる一般的現象であるとは言えず、また、梶田 (1967, 1968) の主張する毎く理想化傾向のアーティファクトとして説明される部分が大きい。

(2). しかし、この傾向の強弱の個人差は類似-魅力説の枠組に基づく仮想的 S P に対する認知様式にも有意な差違をもたらした。As 傾向の個人差指標を考えることの有効性が確かめられた。

(3). なお、嫌いな他者を実際以上に自己と非類似であると認知する傾向、ならびに好きな他者を実際以上に理想自己に近づけて認知する傾向は、多くの人に共通して認められる現象であるが、前者は As 傾向とは独立した傾向と考えられる。

文 献

- Baskett, G.D. 1968 Interpersonal attraction as a function of attitude similarity-dissimilarity and cognitive complexity. Unpublished doctoral dissertation, University of Texas. (Cited in D. Byrne 1971)
- Byrne, D. 1961a Interpersonal attraction and attitude similarity. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **62**, 713 – 715.
- Byrne, D. 1961b Interpersonal attraction as a function of affiliation need and attitude similarity. *Human Relations*, **3**, 283 – 289.
- Byrne, D. 1962 Response to attitude similarity-dissimilarity as a function of affiliation need. *Journal of Personality*, **30**, 164 – 177.
- Byrne, D. 1965 Authoritarianism and response to attitude similarity-dissimilarity. *Journal of Social Psychology*, **66**, 251 – 256.
- Byrne, D. 1971 *The attraction paradigm*. New York: Academic Press.
- Byrne, D., & Clore, G.L. 1967 Effectance arousal and attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **6**, (4, Whole No. 638).
- Fiedler, F.E. 1951 A method of objective quantification of certain countertransference attitudes. *Journal of Clinical Psychology*, **7**, 101 – 107.
- Fiedler, F.E. 1954 Assumed similarity measures as predictors of team effectiveness. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **49**, 381 – 388.
- Fiedler, F.E., Warrington, W.G., & Blaisdell, F.J. 1952 Unconscious attitudes as correlates of sociometric choice in a social group. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **47**, 790 – 796.
- 藤野藤俊 1961 特定の学級に属する成員相互の対人的態度と対人的知覚の関係 熊本大学教育学部紀要, **9**, 97–106.
- 浜名外喜男 1974 パーソナリティ認知過程の研究(Ⅰ) —自己評価水準・受容水準と対人感情— 日本心理学会第38回大会発表論文集, 804–805.
- 林 文俊 1978 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **25**, 233–247.
- Hendrick, C., & Brown, S.R. 1971 Introversion, extraversion, and interpersonal attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **20**, 31 – 36.
- Hendrick, C., & Page, H.A. 1970 Self-esteem, attitude similarity, and attraction. *Journal of Personality*, **38**, 588 – 601.
- Izard, C.E. 1961 Personality similarity, positive affect, and interpersonal attraction. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **60**, 484 – 485.
- 梶田毅一 1967 他者についての概念化と対人感情 心理学研究, **38**, 284–289.
- Kajita, E. 1968 Self-esteem, affect, and interpersonal cognition. *Japanese Psychological Research*, **10**, 111 – 122.
- Lundy, R.M., Katkovsky, W., Cromwell, R.I., & Shoemaker, D.J. 1955 Self acceptability and descriptions of sociometric choices. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **51**, 260 – 262.
- 長島貞夫・原野広太郎・堀 洋道・藤原喜悦・斎藤耕二 1966 自我と適応の関係についての研究(3) 日本心理学会第30回大会発表論文集 513–515.
- 中里浩明・井上 徹・田中国夫 1975 人格類似性と対人魅力一向性と欲求の次元— 心理学研究, **46**, 109–117.
- Peabody, D. 1967 Trait inferences: Evaluative and descriptive aspects. *Journal of Personality and Social Psychology*, **7** (Whole No. 644).
- Rosenberg, S., & Sedlak, A. 1972 Structural representations of implicit personality theory. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*. Vol. 6. New York: Academic Press.
- 田中祐次 1967 交友関係におけるパーソナリティ認知の研究(Ⅰ) —Self-Differential Scaleを応用した測定を試み— 信州大学教育学部紀要, **18**, 17–26.
- White, R.W. 1959 Motivation reconsidered: The concept of competence. *Psychological Review*, **66**, 297 – 333.
- Winch, R.F. 1955 The theory of complementary needs in mate selection: Final results on the test of the general hypothesis. *American Sociological Review*, **20**, 551 – 555.
- 吉田 博 1957 自我の受容と社会的知覚 富山大学教育学部紀要, **6**, 11–22.
- 吉田 博 1964 友情形成の決定因に関する研究(Ⅲ) —人格の類似性と選択行動の時間的継起— 富山大学教育学部紀要, **12**, 1–9.
- 吉田 博 1974 対人魅力の決定因に関する研究(Ⅲ) —一向性面における類似, 非類似の問題— 富山大学教育学部紀要, **22**, 99–107.
- 吉田 博・中川 孝 1969 自己概念の類似性と対人魅力 富山大学教育学部紀要, **17**, 88–100.

(1980年7月31日 受稿)

A STUDY OF INDIVIDUAL DIFFERENCES IN INTERPERSONAL COGNITIVE STYLE (I)

— Assumed similarity and similarity-attraction theory —

Fumitoshi HAYASHI

The purpose of the present research was to explore the mediating influence of a individual difference variable, Fiedler's "assumed similarity" score, on the relationship between personality similarity and interpersonal attraction. Seventy two junior high school students served as subjects.

In experiment 1, each student was asked to describe himself, his ideal self, and his best-liked and least-liked fellows of the same sex on the Self-Differential scales. From these data, the interconnectedness among concepts concerning self and other persons were examined following to the analytical procedure of Kajita (1967). In addition, a measure which has been named "unwarranted assumed similarity" (Fiedler, 1951) was calculated for each subject. Results obtained supported Kajita's (1967) assertion; (1) tendency toward assumed similarity was due to idealization tendency and (2) the main effect of affect (like or not) is the idealization of the other person.

In experiment 2, subjects were all administered a questionnaire that measured their level of activity. About two months later, they evaluated either of two bogus strangers (high or low in activity dimension) on several rating scales. The ratings of each stranger included liking, desirability, preference as a leader, trustworthiness as a long-term friend, perceived similarity, and so forth. The results revealed that subjects low in activity were more favorable toward similar (low in activity) stranger and that this tendency was salient for subjects who had high unwarranted assumed similarity score.